

## 訪問校が抱える課題等

- 若手教員とベテラン教員のバランスを考えた学年構成で、互いのよさを生かそうという雰囲気ができている。また、毎月1回「カリキュラム・マネジメントの日」を設け、「評価」→「改善」のサイクルを教育課程に位置付けている。
- 児童同士が「聞き合う」関係でつながる授業を充実させたい。
  - 児童の力を引き出し、児童も教師も「わくわくするような授業」を目指したい。

## 学力支援アドバイザー・指導主事による助言（管理職に対して）

### ■目指す子供像の具現化に向けた学校組織マネジメント

- ・学校で目指す子供像の具現化のためには、全教職員がチームとしてベクトルを合わせることが重要である。
- ・教職員一人一人が当事者意識をもつために、「関係づくりタイム」など学校の教育活動全体を通して、児童同士が「聞き合う」関係づくりのための時間と場の確保をすることも有効である。
- ・学校行事や児童会行事等における教師の働きかけについても目を向け、（教師の「出」と「待ち」について考える）などについて共通理解を図りながら授業に生かすことが大切である。

### ■育成を目指す「資質・能力」を明確化したPDCAサイクル

- ・単元で目指す「資質・能力」は何か、ゴールを明確化し、単元の中で児童と共有する場を位置付ける。
- ・「カリキュラム・マネジメントの日」等において、児童の成長や変容につながった学習活動について評価する。（有効な言語活動、「見方・考え方」を働かせた場面 等）
- ・全国学力・学習状況調査解説資料の指導例を参考にしながら、調査問題や県の評価問題シート等を生かした授業を取り入れる。

### ■児童の主体性が発揮される「聞き合う」授業づくり

- ・学習環境や言語環境を整えることと、友達の発言を温かく受け止めて聞く学級集団づくりに努める。
- ・児童の思考を揺さぶる問い返しなどを大切にし、児童の「知りたい！調べたい！」を引き出していく。

## 変容

- 訪問において「見方・考え方」を働かせる場面の具体的なもち方について学び、児童の姿で示すことを学校全体で大切にした。
- 日々の授業において、「見方・考え方」を働かせる児童の姿を設定して授業に臨むようになった。
- 学力調査問題と教科書の関連単元において、調査問題等を効果的に活用した実践を意図的に行うようになった。

## 今後に向けて

- ・「児童の力を引き出す、わくわくする授業」の日常化（指導の工夫、学級集団づくり等）
- ・「育成を目指す資質・能力」や「具体的な手立て」を系統立てながら回すPDCAサイクルの充実

## 訪問校が抱える課題等

「学び合い」をねらいに据えた校内研究を通して、分からない生徒に寄り添う姿等、生徒同士の温かいかわりが見られる授業が多い。また、教師が互いに授業を公開し、研究の視点に基づいて意見を記入して交換し合っている。

○学校研究を日常の授業改善につなげたい。

○学習指導要領や全国学力・学習状況調査で求められる学力の育成等、教師の学びをさらに深めたい。

## 学力支援アドバイザー・指導主事による助言（研究リーダー・管理職に対して）

### ■研究の日常化

- ・研究の意義とねらいを全体で共通理解し、定期的に確認する。
- ・研究主任がトップダウンで伝えるのではなく、教師が主体的に考える場や環境作りを工夫する。（例：「生徒が授業で受け身になるのはなぜ？」と投げかけ、改善策を考える 等）ホワイトボード等にも書き出してもよい。
- ・生徒同士の学び合いができてきている強みを生かし、教師と共に、生徒とも目指す姿を共有する。

### ■授業改善を推進するPDCAサイクル

- ・スモールステップでの授業改善の視点を設定する。（例：「今週は、授業においてどの生徒も課題が確実につかめるように課題設定を工夫しよう」等）
- ・スモールステップでPDCAサイクルを回し、その成果を積み上げることで、研究の日常化と意識化を図る。

### ■教師の学びを深める

- ・自主的に授業を公開する教師が、研究の視点に沿った提案事項や授業改善の視点を明確にして公開し合うようにする。また、参観する側も視点を共有したうえで授業を参観し、教科等を越えた学び合いを活性化させる。

## 変容

- 「研究の日常化」を図るために研究主任を中心として校内OJTの充実や目指す生徒像に迫る授業づくりについて学びを広げることができた。
- スモールステップでPDCAサイクルを回すことや、提案事項を明確にした授業公開などを実践し、成果や課題を共有することで、教師の授業改善に対する意識の向上につながった。
- 思考の深まりにつながる「学び合い」の充実を図る努力が続いている。

## 今後に向けて

- ・課題の明確化と授業改善をつなぐPDCAの短期サイクル
- ・生徒と教師が共に学びを創る研究体制づくり
- ・授業改善の日常化と目指す生徒像の意識化

## 訪問校が抱える課題等

- アクションプランが、取りまとめた管理職や学力向上担当者中心のプランとなっしまい、全職員で共有して実践に移すことが困難である。
- 学校で育成したい資質・能力や校内研究テーマとアクションプランとの関連が薄いため、日常的な実践につながりにくい。また、アクションプランの達成状況の基準が不明瞭なため、PDCAサイクルを機能させながら実践していくことが課題である。

## 学力支援アドバイザー・指導主事による助言

### ■アクションプランの活用

- ・管理職に対して、全国学調、県学調の分析結果と教育目標、校内研究主題、学力向上対策から学校として育てたい資質・能力を明確にしたアクションプランを作成する。さらに、学力向上に向けての最重要課題を焦点化し、全職員が取り組みやすく、数値による評価を行うことでPDCAサイクルを機能させる。
- ・記述力の向上を意識した授業づくりなど、取り組みを焦点化して学力向上対策を行う。

### ■全国学調、県学調等の問題や分析を活用した授業改善

- ・調査問題や国語と算数の分析結果の相関などを学校組織として分析し、「問われている力」「なぜ児童は間違えたのか」「本校の課題」「今後どのような授業を実施していけばいいのか」などを子ども目線で考え、アクションプランに整理する。

## 変容

### 学校からの声より

- 助言により、学校で育てたい資質・能力を絞り込み、アクションプランに落とし込むことで、焦点化され教育活動の中で具体的な取り組みが計画でき、実践することができた。
- アクションプランの日常的な実践に課題があったが、助言にあった、数値による評価を行うことで、PDCAサイクルが機能してきた。
- 普段の全国学調の結果資料が膨大なため、全職員間で共有し、有効な活用が難しかったが、今回作成された分析結果から「記述力」に焦点を絞ることで、日常的な授業改善に取り組むことができた。

## 今後に向けて

- ・アクションプランを軸とした、学力向上に向けた授業改善及び組織力の向上
- ・「思考ツール」を活用した、日常からの授業改善
- ・記述力向上のための取り組みによる変容を把握し、指導に生かすための評価方法の工夫（定期的に記述問題に取り組みさせる など）

## 訪問校が抱える課題等

- 教職10年未満の若手の教員が多く、校内OJTを充実させ若手教員の担任力の向上を図る必要がある。
- 新しい生活様式の中での「主体的・対話的で深い学び」を実現させる手立てについて模索している。
- NRTの結果分析などにより児童の実態を把握して、国語と算数における学力向上のためのアクションプランを作成して授業改善を進めたいと考えている。

## 学力支援アドバイザー・指導主事による助言

## ■学力向上の下支えとなる学ぶ力の育成(学校長と教務主任との話し合い)

- ・学力向上には児童の学ぶ力の育成が不可避である。学ぶ力の育成という視点でも具体的に系統立てて実践していく必要がある。

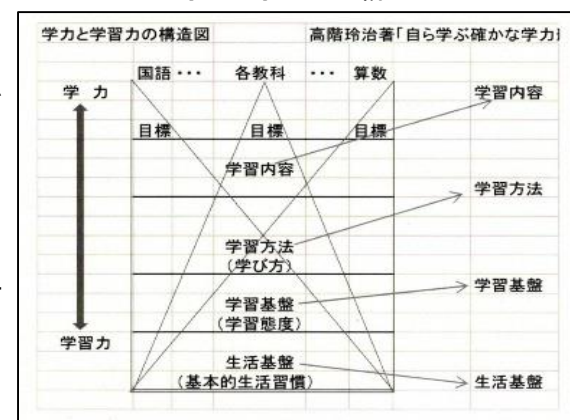
## ■研究の日常化(教頭、教務主任との話し合い)

- ・学力調査等の問題分析や解答分析を行い、対策として共通実践事項(P)を定め、実施(D)していくことが大切である。
- ・学力向上に向けた校長の意識、教頭の調整力、教務主任の具体策、研究主任の授業改善策等、各段階での(C, A)を日常化していく必要がある。

## ■後半重点型の授業への転換(教職3年目の教員との話し合い～1学年算数～)

- ・適切な評価規準と評価基準を設定し、適用題を解かせて理解度を確認する。授業づくりでは、何がどの程度できれば目標が達成できたといえるのかを明確にする。
- ・児童のつまずきを予想して、適切な支援を準備しておくことで学びの空白を回避する。

学力と学ぶ力の構造図



## 変容

- 児童の学習状況を確認しながら声がけやつまずきに対する支援を行うなど、どの児童にも空白の時間を作らないような配慮が、児童の意欲を持続させ、学びに向かわせる手立てとなっていた。
- アクションプランを全教職員で作成し、日常化につなげるために職員室に掲示するなど工夫が見られる。
- 教職3年目の教員の授業は高まりがみられ、組織的な学力向上の取り組みも推進されている。

## 今後に向けて

- ・C, Aの確実な機能による学力向上の取り組みの意識化と日常化
- ・生活基盤の安定と学習基盤の醸成が学力を下支えしていることを意識した、主体性や協働性の系統的な育成
- ・各教科に共通する学習スキルと教科特有の学習スキルを意識した授業改善

## 訪問校が抱える課題等

- 確かな学力を育成するためにも、校内OJTを充実させ若手教員の担任力の向上を図る必要がある。
- コロナ禍における対応もあり、課題の与え方が一律で、講義式の授業も見られる。
- 「わかる、できる」実感を伴う授業とするために、個に応じた支援を充実させる必要がある。
- 1学期の休校や分散登校の影響なのか、1年生の「主体的に学びに向かう意欲」を課題と捉える学校が多い。

## 学力支援アドバイザー・指導主事による助言

- 教科として育てたい資質・能力を明確にしたカリキュラム・マネジメント（学校長、研究主任との話し合い）
  - ・大規模校のよさを生かし、短いスパンのPDCAサイクルで教科ごとに授業改善やカリキュラム・マネジメントに取り組むことが効果的である。
  - ・学校として育てたい資質・能力を基に、教科特有の見方・考え方に応じた教科ごとの育てたい資質・能力を明確にして年間計画や単元計画、授業展開を見直していく。
  - ・授業改善の視点に、教科の学力や教科特有の学び方という視点を取り入れる。
- 後半重点型の授業への改善（研究主任、教職3年目の教員との話し合い）
  - ・児童生徒が何をどう学んだかという視点で授業を見直してみると、授業後半の充実が欠かせない。適切な評価規準と評価方法より学びの実態を捉え、指導改善と学習改善に生かしていく。
- 個に応じた支援の充実（教職3年目の教員との話し合い～2学年英語～）
  - ・生徒の活動量をもっと確保する。学力差を課題と捉えている場合、3段階の到達目標を設定し、それぞれの段階のつまづきを予測した対応を考えておくなど、学びの空白を生まない工夫をする。

## 変容

- 「比較級・最上級を一度は使って20語くらいの英文つくることができればA」など何段階かの到達目標を生徒に示し、自己目標を設定させた。学習プリントは評価と事後指導に生かせる形式になっていた。
- 生徒の困り感に応じて学び合いを仕組みながら英作文に取り組ませたり、ICTを活用して互いの進捗状況を確認し合ったり、より質の高い英作文に挑戦できるように、個人差に配慮した支援の工夫があった。
- 若手教員の授業力が向上し、生徒の主体性を生み「できた」ことの実感につながる授業になってきた。

## 今後に向けて

- ・各教科を学ぶ意義や楽しさを実感できる授業づくり
- ・新学習指導要領の確かな理解に基づいた教材研究の充実
- ・学びの実態を的確に把握し、指導に生かすための適切な評価規準と評価方法の設定（後半重点型の授業改善）

## 訪問校が抱える課題等

- 校内研究リーダーを中心に、若手とベテランをつないだ校内OJTの活性化が望まれる。若手教員が多く、研修する機会を強く求めているが、コロナ禍等で厳しい状況である。先生方の学びを充実させたい。
- 教科、学年の枠を超えて、学校研究を充実させていきたい。
- 新学習指導要領における「指導と評価の一体化」のための学習評価に向けて、職員の共通理解が必要である。

## 学力支援アドバイザー・指導主事による助言

- 校内OJTの活性化（学校研究と教科部会、授業研究会と日常の授業をつなぐ視点を持つ）
  - ・「つけたい力を明確にした授業づくり」を行うためには、教科部会の充実が求められる。さらに、教科を越えた協働的な研究のために、普段の授業から「評価を学校全体でひらいていく」ことが重要である。
- 単元デザイン力と授業コーディネート力（学ぶこと、教科のおもしろさを味わわせる）
  - ・指導と評価の一体化のためには、単元づくりが「要」となる。そのためには、的確な実態把握（全国学調、NRTも含）と深い教材研究が必須である。その単元デザインに基づいて、日々の授業の中で、児童生徒が「分かった!」「おもしろい!」「できる!」と実感できるように、コーディネート力を発揮していきたい。
- 小中連携の視点（担任力を土台にした授業づくりの重要性）
  - ・同学区の小・中学校で共通理解を図って取り組んでいくことが効果的である。児童生徒にとっては、学びは連続するものであるため、教師自身が学年や教科を越えて語り合うことが大切である。

## 変容

- 3回の訪問により、年間を通した学びにつながり、先生方の主体性が生まれ、授業改善と評価改善の必要性についての意識が高まった。訪問→話し合い→改善・実践のサイクルが効果的であった。
- 授業改善と評価改善に向けて、教科部会の話し合いが深まり、具体的な教科の取り組みにつながった。
- 新年度4月に配布する生徒向けのオリエンテーション資料を作り直し、職員会議等において、全教科分を全職員で話し合い、育成を目指す資質・能力について、共通理解を図ることができた。

## 今後に向けて

- ・2年度の研修を生かした授業実践の蓄積と、客観的な指標に基づく検証
- ・育成を目指す資質・能力を明確にした授業づくりと、的確な実態把握と深い教材研究に基づく単元デザイン力と授業コーディネート力の向上（習得、活用、探究のバランスを意識して）